

大陸（満州）

満州国境警備

初年兵で討伐戦参加

富山県 本庄 長一

私は、大正八年六月二十七日、現住所の富山県魚津市の農家の八人兄弟の一人として生まれました。

大阪第八連隊の兵舎に集合を命ぜられ点呼をとり、直ちに民間の旅館に宿泊しました。翌日、本願寺で軍服を支給され、再び旅館へ戻りました。二月二十三日午後旅館を出発、輸送船に乗船し船内で一泊、翌二月二十四日大阪港を出帆、二十七日朝鮮の羅津港に着、船内で一泊、二十八日羅津上陸という、あわただしい

日程で満州へ入ったのです。

牡丹江市に第十九大隊の本部があり、そこで大隊長（大佐）の訓示を受け、三月一日、道河（牡丹江省東寧県）という所の第一中隊に着。第二中隊は老黒山、第三中隊は本部と一緒の牡丹江市、第四中隊は下城子（牡丹江省穆稜県）。簡単に言いますが、各中隊との距離は非常に遠いのです。

大隊本部 牡丹江（牡丹江省牡丹江市―浜綏線―綏芬河―哈爾濱）

第一中隊 道河子（牡丹江省東寧県―綏寧線）

第二中隊 老黒山（牡丹江省東寧県―興寧線）

第三中隊 牡丹江市

第四中隊 下城子（牡丹江省穆稜県、八面通―浜綏

綏線）

地図による本部、中隊間の概距離は牡丹江市―道河子（一〇〇キロ強）。老黒山は更に遠かったといえます。第四中隊の下城子は牡丹江市から一〇〇キロ程度はあります。従って第一中隊駐屯地から第四中隊駐屯地までは、二〇〇キロ以上あり、私は列車で五時間くらいかかったと記憶しています。

我が中隊の隊長は大尉であり、中隊の主任務は鉄道警備でしたが指揮下には鉄道警備隊、森林警備隊がありました。広範匪の地域を警備するのですから、満州国の軍隊も指揮下に入れてありました。

この地域牡丹江省は、東はソ連と国境を接しており、南は間島省であるので、北朝鮮とも隣接するので。従って、満ソ国境ではソ連軍の越境もあり、南には金日成の共産党が出没しているという所でした。従って、単なる満州駐屯ではなく、常に小戦闘が起こっているという話が隊長の訓示の中にもあり、また分隊長や古参兵からも、いつ戦闘があるかもしれぬと注意されており、初年兵として渡満している我々は緊張の日々でした。

中隊配属して早々、三月十四日非常呼集がありました。金日成軍が戦闘をした満州国軍の兵舎を襲撃し焼き払ったための動員でした。しかし、列車の都合で翌日救援に出発ということでした。その頃から五月初旬に至る間討伐が続いたのです。この戦闘で我々の仲間西田、金山両君が戦死をしました。

我々初年兵は基礎教育も受けずに直接戦闘に参加をしたわけです。討伐のため中隊に帰れません。一時、治安も落ち着いたのですが中隊には帰らず、野戦で、討伐地で教育を受け、一期の検閲も戦場で受けたのです。

道下に来た初年兵は八十七人と記憶しています。内地での教育とは違って、「ゲリラが出た、匪賊が来襲した」との情報があれば近くの警備隊が出勤し討伐するのです。従って、中隊に帰っての生活はほとんどなく、分屯地での警備、討伐ですから、一期検閲後、僅かの期間のうち五―六回討伐に出ました。我々の軍隊教育は戦闘を交じえ、いわゆる実戦による教育であったのです。ですから、入営から除隊まで、中隊の本部

に帰っての勤務、生活は合計六カ月間くらいであり、他は分遣隊での警備、討伐に終始していたので。

一個中隊の兵員は二百七十〜八十人ぐらいで、毎年入る初年兵（一年次兵）は各七十〜八十人ぐらいだったと記憶しております。中隊長は赤城大尉です。十二月三日、道河の討伐は中隊長指揮のもとに出動したのですが、三年兵（我々二年次先輩の古参兵）が現役満期除隊になるので、その代わりに我々初年兵が出動しました。

私は、第一期の教育では一般散兵（一般の小銃、軽機関銃、擲弾筒）でしたが、二期は九二式大隊砲で一カ月半教育であったのです。その間に討伐に参加したので、大隊砲教育期間は丸一カ月でした。

十二月三日の討伐から帰ってから、司令部（第九・二十・二十一大隊）で暗号教育を受けました。司令官は少将ですが、日本軍のみならず鉄道警備、満州国軍も指揮下に入れておりました。私は先程も申したように、教育、分屯、司令部、大隊本部等々とほとんど中隊に帰って一般勤務につくことが少なかったの

す。

昭和十六年七月十六日、臨時編成下令（関特演といわれる大動員）のため、暗号教育から中隊に帰りました。さらに二、三年兵の時、初年兵の大隊砲教育助手をやるため、四十六司令部から第十九大隊に降りました。大隊本部は牡丹江市から、第四中隊駐屯地の下城子に集結していました。その時に日ソ不可侵条約が締結され、ソ満国境は小康状態になったといえます。従って満ソ国境のソ連軍は欧州の対独戦争へ移動配備となったのでした。

我々の任務は治安が主でしたが、万一対ソ開戦、ソ連軍侵攻の時は、後統部隊が来るまで我々が国境を守るということになっていたらしく、そのため、我々は国境へ分遣されたこともあります。初年兵の時も二年兵の時も、分遣隊に出されました。中隊の警備地区の中で、兵長か上等兵が長で七〜八人で警備をするのです。支那派遣軍より少ない兵力ですから分遣の長は兵長か上等兵でした。

三年兵の時、ノモンハンの捕虜となった元日本兵が三人ぐらい潜入して来ました。牧草の中にもぐり込んで、こちらの情報を取っていました。その人たちは、ノモンハンの時火焰放射器でやられて捕虜になったということで、本人は戦死した事になっていました。我々は捕虜として軍司令部へ送ったのですが、その後どうなったのか、心にかかっています。

井上中尉と討伐に行った時、金日成の部下らしい者と鉢合わせをして捕虜にしたことがありました。後ろ手に縛っても白状しなかったのですが、持っていた拳銃を捨てたので密偵と判断し、司令部に送り、褒められたことがあります。

私は偵察中密林の中で迷子になったことがありません。どこだか判らなくなったので、高い山に登って探すのですが、同じ所を通り自分の足跡を見つけたのです。小隊は十八人程度で行動するのですが山の中に入ると判らなくなり、山頂へ出て稜線（山の尾根）を通り、三日間も迷ったことがあります。また夜中、闇の中で光る眼らしいものを見たこともあり

ましたが、それは虎の眼であつたらしく、国境附近の密林ではこんな体験もしたのでした。

昭和十七年九月一日、下士官勤務兵長として現役を満期除隊し故郷へ帰ることが出来ました。大東亜戦もまだ勝っていた時期でしたから、家で農業に従事し、食糧を増産しつつ、後輩の人達の入営、召集を見送っていました。しかし、一年も経過すると、もうそろそろ再召集があるのでと思いつつ、昭和十九年の十二月を迎えました。

案の定、十二月九日、富山の歩兵第三十五連隊留守隊であつたか、第五十二師団（柏兵団）の歩兵第六十九連隊補充隊であつたか、とにかく、富山連隊の第四中隊に召集入隊しました。続いて、私の兵歴からか、歩兵砲中隊に編入をされました。

昭和二十年一月十四日、南方軍総司令部補充要員として屯営を出発、宇品港出帆後はジグザグ航路をとり輸送船は台湾の基隆に着きました。壺一枚の広さに九人が詰め込まれるので九人のうち三人は甲板で寝ると

いう超満員で、横に寝ることは出来ないから座るのがやっとなという有様でした。救命胴衣は、孟宗竹の前に二、三本、後ろに四本を麻縄で結んであるだけです。

沈没したらと思うと、まことに心細い限りでした。

夜はエンジンを止めて停泊します。これは敵の潜水艦の音波探知機に発見されないためであったとのことでした。二月ですからいくら南に近いといっても甲板で寝るのは寒いので、九人中三人は交代で船内の畳の上で仮眠をしていました。台湾へ行く船の段階では生きて帰れないと思っていました。

無事に台湾に着くことは出来ましたが、南方軍の軍司令部は、フィリピンから仏印に移動していましたし、比島沖海戦、台湾大空襲、台湾沖の海空戦、それに三月には沖繩沖海戦、四月一日、米軍の沖繩上陸、沖繩の玉砕等が続いて起こっています。しかし、幸か不幸か、沖繩へ行った富山の歩兵第三十五連隊は、第十師団と共に台湾防衛のため台湾へ来ました。また、同じ富山の歩兵第六十九連隊は南洋のトラック島で終戦を迎えており、両連隊とも玉砕を免れるという幸運

でありました。

私達は仏印に行くことなく台湾に上陸し、第十方面軍の隷下にあつて台湾の防衛戦に当たることになりました。しかし、台湾に來ると予想した連合軍は、直接沖繩へ上陸し、第三十二軍は玉砕しました。台湾では本土の盾となるつもりで精銳師団を揃えていましたが、空襲以外の損害はあまりなかったのです。

八月十五日終戦となり、安藤利吉大將は、昭和十九年第十方面軍（台湾軍）軍司令官に任せられておりましたが、内地に帰還することなく、昭和二十一年自決されました。

我々も、日本敗戦と聞いた時は死なねばならないと思っていたのですが、幸いにして故郷に帰還することが出来たことを幸せと思う今日であります。